

支え合いの地域社会づくりと高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義

新潟医療福祉大学社会福祉学科・豊田 保, 柳田真実

【背景】

団塊の世代が後期高齢者人口に位置づけられることになる2025年は、65歳以上の高齢者人口は約3650万人で、人口に占める割合が約30%に達する。また、75歳以上の人口は約2200万人で、全人口に占める割合は約18%であるが、65歳以上人口の約6割が75歳以上人口である。

新潟市中央区社会福祉協議会による同区内の世帯に関する調査によれば、65歳以上の1人暮らし高齢者の出現率は約36%である。また、2010年の厚生労働省による『国民生活基礎調査』によれば、全国の高齢者夫婦世帯数は約620万世帯で、1人暮らし世帯が約500万世帯とされており、約1100万世帯以上が高齢者のみ世帯である。

このような超高齢社会の進展のもとでは、元気な高齢者を中心とした地域社会における高齢者相互の支え合いの仕組みを構築していくことが必要であると主張できるが、本発表では、支え合いの地域社会づくりにおける「ふれあい・いきいきサロン」が果たす意義について明らかにする。

【方法】

高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に関する近年の研究内容について文献上の考察を行い、筆者が主張する「ふれあい・いきいきサロン」は地域社会における高齢者相互の支え合いの仕組みを構築するための1つのツールとしての役割を果たしているとの見解と、近年の研究内容を総合的に考察し、「ふれあい・いきいきサロン」が地域社会づくりの役割を果たしている積極的な意義について明らかにする方法を採用する。

【結果】

近年の高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の設置数の拡大に伴って、同「サロン」の持つ意義についての研究も増加してきているが、その中のいくつかの代表的な研究を以下に紹介する。

藤本は、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加者である242人に対して質問紙による調査を行い、参加者に対する「ふれあい・いきいきサロン」の効果について、次のように整理している。

具体的には、a)自分のことを気にかけてくれる人ができた(36%)。b)趣味や地域活動をする友人が増えた(33%)。c)悩みを相談できる友人が増えた(14%)。d)近所の人と以前より話すようになった(10%)などを参加者の声として紹介している。

山村は、同「サロン」について、「閉じこもり防止や健

康づくり、仲間づくりなどに留まらないで、地域社会の一員である住民同士のつながりを再構築する場として、地域社会づくりの意義を持つ」と主張している。

高野は、同「サロン」の持つ意義について、a)高齢者の貴重な外出の機会である。b)高齢者が若いボランティアとの会話を楽しんでいる。c)社会連携の再生や再構築のための方法として有効である、などについて指摘している。

【考察】

全国社会福祉協議会は、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の目標について、「ひとり暮らしであったり、家族がいても昼間ひとりきりで、会話をする相手もなく閉じこもりがちに暮らしている高齢者などが、気軽に外に出て仲間づくりをしたり、一緒に食事をするにより、高齢者がいきいきと元気に暮らせることを目指す取り組み」として位置づけている。

このような高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の目標については当然肯定されるべき内容であるが、本発表では、同「サロン」の目標について、一人ひとりの高齢者が地域社会を構成する一員として位置づけられ、高齢者夫婦世帯の高齢者も1人暮らしの高齢者も安心して暮らすことができる住民相互の支え合いの地域社会を構築する必要性との関係で、その意義については考察される必要があると主張するものである。

こうした観点から、近年の「ふれあい・いきいきサロン」についての研究内容を考察すると、高齢者を地域社会を構成する一員として位置づけ、地域社会のあるべき姿との関係で、同「サロン」の意義を考える視点には妥当性があるといえる。

【結論】

具体的には、地域社会における高齢者のつながりを再構築する場としての役割、高齢者の新たな出会いや新たなつながりの場としての役割、地域社会の組織化を推進する役割などを持つものとして高齢者「ふれあい・いきいきサロン」を再評価する必要があると捉えられる。

高齢者の地域生活を考える場合、高齢者一人ひとりに対する支援を豊かにしていくことは重要な課題であるが、同時に、地域社会における高齢者の人間関係を豊かにし、支え合いの地域づくりを推進するためのツールとして、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」を位置付けることこそが重要であろう。

【文献】

文献については、文字数の関係でポスター発表時に出典を明確化する。